

199 山と人 神戸大学山岳部

様である。殆んど氷は落ち岩場は夏の様  
 である。雲が出て来て明日の天気が心配な  
 ので、今日主稜を下り、北山稜を登つてし  
 まうことにする。状態が良いので一年生も  
 つれてゆく。ビヴァークの用意は十分整え  
 る。頂上で記念写真をとり、豊田、萩原隊  
 と中家、福本隊に分かれてアンザイレンす  
 る。P1~P3まで雪がくさり予期しない時  
 間を取る。全部 one at a time で進む。  
 雪が悪く夏の様にC沢側は下れず、リッチ  
 通しに下る。P4からルンゼを左にトラヴ  
 ナースしてPBに到着。雪が多くピークは  
 明確に出ていない。行動食をとる。豊田隊  
 が先行する。PBを50米程登ると、北山稜  
 は雪稜から岩稜に変わり、快適なクライミ  
 グが楽しめる。ホールドについている雪を  
 落すくらいで、ほとんど夏と変りない。P  
 2、PC間のコルからP2の頂上にかけて  
 がこの登攀の山ともいふべきところだ。  
 特に最後の30米が面白い。クラックの底  
 の氷にアイゼンをきかせて登る。P2頂上  
 への最後の4米は右手から登る。六甲保量  
 の正面ルートの様で、アイゼンをはくとな  
 かなかしぶい。(以上、豊田寿夫記)

○北尾根隊(5、6のコルより)(水口、  
 山内)  
 4.00出発。5.45 5.6のコル。6.50 3.4  
 のコル。9.45 3峰頂上。10.00前穂頂上  
 着。10.45前穂発。12.35帰着。

3時起床、星がかすんでいるがますます  
 の天気である。直ちに食事を済まし、大型  
 キスを二人共持ち、ビヴァークの準備もし  
 て出発する。ラテを頼りにザイテンをまつ  
 しぐらに駆け下る。アイゼンだけなので膝  
 の辺りまでもぐるがまず快適の方だ。漸く  
 薄明るくなつて来た頃5.6の雪溪にさし  
 かかり、日の出丁度に5.6のコルに到着  
 する。東の空の朝焼けが、赤黒く、嫌な色

で気味が悪い。天気が悪くならないうちに  
 とピッチを上げる。北尾根3、4のコル迄  
 は、トレースがあつて、夏より楽な位で  
 ある。ここまで一時間、全く快調である。  
 いよいよここからアンザイレンし、三峰の  
 悪場にさしかかる。最初のピッチ、スラブ  
 のルンゼ状の所を登るが、氷はついていな  
 いが、アイゼンがガリガリ鳴つて気味が悪  
 く、相当しぶい。この時、山内は、ジツヘ  
 ルの為、ピッケルをハンマーで雪面に打ち  
 込んでいる際石突きを折つてしまう。次の  
 ピッチでチムニーをくぐり抜ける。チムニ  
 ーは、東工大がボーラーの時、掘り出した  
 らしく、全く容易に通り抜ける。ここより  
 正面の凹状の壁を登らず、酒沢側に出た  
 が、ちよいと見ると容易そうなのだが、い  
 ざ取り付いて見ると仲々しぶい。雪が、日  
 陰の為か全然しまつていなくて、さらさら  
 で、非常に状態が悪い。このピッチで一  
 時間以上かかった。後二ピッチで、三峰頂上  
 に立つた。この時、9時45分、2時間半も  
 かかつてしまつた。ザイルをほどき、後は  
 難なく前穂頂上に10時に着いた。こんなに  
 早くついて何んだか、柏子抜けがした。し  
 かし、雪が落ちついて状態が良く、又トレ  
 ースがあつたからであつて、そうでなけれ  
 ば、もつと時間がかかつてあろう。

3月25日

天候	⊙	⊙	⊕	⊕
雲量	9	10	10	10
温度	-6	-4	-5	-3
風向	→	→	→	→
気圧	703	703	702	702

天気が悪く、ガスがかかっているの  
 で、停滞と決定する。高曇りから次第に、風雪  
 になつた。9時すぎ、岐阜登高会の高橋、  
 佐藤、両氏他1名が小屋に上つて来られ  
 た。例の如く、全員小屋に集り、将棋、歌



山と人

199



神戸大学 山岳部

唱練習等で1日を過す。北穂小屋の連中は、どうしていることやら案じられた。

○北穂隊（北穂小屋泊り）

7.30北穂小屋発。8.00第2尾根 P 3 Faec 取つき。9.30Face 登攀終了。9.50P 3 頂上。10.10小屋帰着。

P 3 の face とは、第2尾根P 3 正面の40m 程の面白いである。夏途中迄登つたことがあるが、3月24日に北山稜を終了したので、25日にはここで愉快的な登攀を楽しんだ。氷がつけばしぶいであろうが、25日には氷は少く、夏とあまり変わらない状態だつた。（豊田記）

3月26日

天候	☉	☉	●	●
雲量	10	10	10	10
温度	-2	0	1	0
風向	→	→	→	→
気圧	700	698	696	695

相変わらず天気悪く、ガスがかかっている。停滞する。北穂隊も今日は停滞しているだろうと推定する。昼前より霧雨となる風は弱く、温い。

北穂隊、停滞。

3月27日

天候	☉	☉	☉	①
雲量	9	10	10	3
温度	-6	-7	-7.5	-11
風向	↖	→	→	→
気圧	694	692	692	691

北穂小屋へ青木、山内向う。

10.00 出発。北穂小屋より豊田、中家、荻原、福本帰つて来た。

15.00 穂高小屋に帰着する。

前日の霧雨で状態は余りくない。奥穂への登りは、又一面の氷におおわれている。合宿の残り日数も少くなつて来たので、青木山内は、クラック尾根アタックの

為、北穂小屋に向けて出発する。途中で、北穂より撤収して来た豊田等4人に出会い、ハーケンの不足を聞き、山内独りで穂高小屋に取りに帰つて来た（14.30）。ハーケンを必要数だけ持ち再び出発する。（15.30）。豊田等4人は、無事に帰つて来た。1年生もともに第二尾根を登攀した事を聞き、その労をねぎらつた。

3月28日

天候	①	☉	☉	⊕
雲量	2	8	9	10
温度	-14	-8	-9	-12
風向	→	→	→	→
気圧	692	691	688	686

○ジャングル隊（水口、豊田、中家、荻原）

8.30出発。9.50コブの頭（ジャンは頂上を径て）。10.40コブの頭出発帰途につく。12.40帰着。

久しぶりの太陽をあおいで、今日はジャングルのフィックスザイルの撤収に向う。岡田、村上も奥穂迄来たが、調子が悪いし、又両人ともジャングルへは行つていたので、帰らせる。荻原は、始めてなので同行する。雪は良く締つておりピッチをあげる。特に飛驒側の雪の附着状態良く、ロバの耳のトラヴァースも非常にスムーズに通る。ジャンは頂上に登り、コブの頭で休憩し、昼食を取る。ジャンは、今度はトラヴァースルートを取り、通過する。ロバの耳のフィックスザイル撤収は、豊田、中家にまかす。中家慎重に撤収しながら、ハーケンも全部抜いて来た。無事終了。丁度12時である。雲が西から、いつの間にか押し寄せて来て空をおおつてしまつていた。15時すぎより、小雪が降り出し、ガスに包まれる。

次に、北穂小屋より、クラック尾根アタ

ックに向つた青木、山内の行動を、同宿していた岐阜登高会及び日比谷高校OBより聞き、わかつた所だけを記す。

7.00 北穂小屋出発。B沢を下り、クラック尾根末端より取付く。

13.00 頃、通称、眼鏡の下、1~2ピッチの所を登攀中の2人を日比谷高校OB杉山氏を見る。

15.00 青木兄（当日横尾より穂高小屋を経て北穂小屋に着く）ヤッホーを交す。

17.00 青木兄再びヤッホーを交し、アイゼンのきしる音をすぐ下に聞く。

19.00 青木兄再度ヤッホーを掛けたが、今度は応答なし。ビヴァークしたものと考え、そのまま小屋に帰る。天気は相当悪く風雪となつていた。

3月29日

昨夜来の降雪止まず、風強く、穂高小屋では停滞していたが、岐阜登高会高橋氏、風雪の中を、北穂より連絡に來られ（14.00）、青木、山内が、昨日朝出発したまま、今朝10時になつても姿を見せないとの報を知らせて下さる。直ちに水口、豊田、中家は高橋氏と共に北穂小屋に向う（14.40）。風雪ははなはだしく、これではクラック尾根を登つていとは思えない。北穂小屋に着いた（16.10）が、未だ消息不明との事、今朝よりの捜索状況を聞き、直ちにB沢へ向う青木兄、佐藤-岐阜登高会、水口、豊田の4人のみで行く。

今朝10時頃よりの挿索は、青木兄、日比谷高校O.B.杉山氏等により、北穂頂上から、クラック尾根上部を降り、頂上から二番目のテラス（頂上より約50m下）辺りまで行われた。それによると、頂上から二番目のテラスに小便の跡があるのを発見し、

其のテラスより上へのびる氷のクラックに2、3ステップが刻んであるのを発見したとの事である。尚其の辺りにはビヴァークの跡はなかつたそうである。杉山氏の話では、其のテラスを一段下つた所にビヴァークするのに少しはしのぎよい岩陰があるので、合図をしたが、応答はなかつたそうである。従つて彼等がそのテラス迄登つて来たのは確かだが、そこには現在居ず、B沢側へ下りたか或いは、落ちたかも知れないということが推定された。

B沢の上部は、雪が吹き飛ばされ、先日の雨で凍つたと思われる旧雪がそのまま露出しており、アイゼンは良く効いた。どんどん沢を下つたが、真向から吹き上げて来る吹雪にたちまち顔中が凍りつき、まつげに氷のかたまりがくつき前方が見えなくなる。昨日彼等が降りた足跡が所々残つている。クラック尾根の側壁を注意しながら降つて行くうちに、クラック尾根と第一尾根との間の滝（B沢側へ向つている）の附近で、ヘッドライトの反射鏡を発見する。つづいてそのすぐ下で、ピーナツツ（アタック食として持っていたもの）が散乱しているのを発見する。つばで溶かして見るとほぼ人血に間違いないと思われた。これで少くともどちらか1人は、B沢に下つたか、落ちた事が推定された。しかし既に6時近くなり、天候も一向に良くなりそうもないし、又その地点より下は、新雪が50cm程度つもつており雪崩の危険が考えられたので、一まず小屋迄引返し、前後策を考へることとする。そこで皆で、ヤッホーをかけながら、クラック尾根の側壁を注意しつつ小屋に引返した（19.00）日比谷高校OB.に挨拶に行き、詳しく様子を聞く。この状態ではクラック上部を降りて見るのは危



事、それは高橋氏にお願いして共に帰つて戴く事にした。7時全員笠ヶ岳鉱業所に着き、ここで宿泊させていただき、高橋氏と水口は蒲田温泉迄下り、電話連絡する。青木の遺族の方々及び学校より補導課長等が来られた(午前1時過ぎ)。真ちに、遭難状況報告及び茶毘の打合せを行い、御遺族の方々が行ける所まで、遺体を下すことにする。小鍋谷の出会い迄の予定。茶毘の方は北飛山岳会の方々に準備をお願いします。

4月1日

前日のメンバーに、青木の叔父さん、友達の富田君、北飛山岳会の古田さん他1名と神岡警察の方1名を加え15名で遺体引下しに向つた。この日、山内の御両親と、神戸よりの救援隊が到着。

6.00蒲田発。8.00笠ヶ岳鉱業所発。10.40滝谷出合に着、昼食をとる。12.00遺体をスノーボードに乗せ出発する。15.50小鍋谷出合に着。医者による検死、遺族との面会。17.30茶毘に付す。21.30殆んど終了。

4月2日

朝10時よりお骨拾いをし、一部は滝谷の出合いに分骨しに行く。滝谷が良く見える対岸の大きな石の根元に埋めた。

4月3日

遺骨それぞれ故郷に向う。尚ベースキャンプの撤収は、大阪よりの救援隊が上高地から入山して、無事終了し、4月8日に帰阪した。

次に遭難当時の模様についてであるが、現在分っている事実や資料等をまず記し、それに基づいて、我々が推定した当時の状況を述べて見たいと思う。

まず第一に、後日晴天の日を待つて、クラック尾根、第一尾根を登攀した日比谷高

校OB杉山氏の話しや、又その手紙から判明した事実は次の通りである。

クラック尾根末端から、主に第一尾根側に良いルートを選んだステップがつけられおり、例の小便の跡のあつたテラスから、上にのびる氷の張つたクラックに、2~3mのステップを刻んだ跡が残つており、そこでトレースが無くなつていたという。

山内の使用したビッケルとオーバー手袋が、クラック尾根と第一尾根の間のガリーにある通称広場と云われる所に落ちていたということ。

第二に、彼等の遺体がつけていた物について述べて見る。

青木は、アイスパイル、ハーケン、カラビン9個を身につけていた。山内は、ハンマーだけをつけていた。ナイロンザイルは、青木の方が2~3mの所で切れていた。切れ口は両方ともほどけていたが、青木の方についていたザイルの切れ口が、青木の側から、切れ口に向つて、ひどくこすれた後があり、3本燃りのザイルが、約40センチにわたつて1本ずつ段階的に切れていた。青木はサブザックをつけていたが、底が破れていた。

第三に当時のB沢の状況は、第一尾根とクラック尾根の間のガリーがB沢に落ちている滝の下に雪面に、ピーナッツ(アタック食として携行したもの)が散乱していた。そしてヘッドライトの破片がちらばつており、又血痕が雪面に附着していた。

以上の様な色々な事実から我々が推定した遭難状況は、次の様なものである。

青木、山内は、当日朝7時に、「今日は、B沢を下り、偵察を行い、帰りはC沢を上つて来るかも知れない。」と云い残して、小屋を出発した。従つて8時頃には、

取付点に達し、登攀準備を整え、8時半頃には登攀を開始したものと思われる。そして順調にピッチを上げ、杉山氏が云う様に良いルートを選んで、ハーケンも3本程しか使わず、悪場も殆んど通り越し、8分通り登つた所にある例の小便の跡のあつたテラスに到着し、いよいよそこから最後の悪場である傾斜60程度の氷の張りつめたクラックに取りついたものと思われる。しかし長時間にわたるアルバイトと、天候の悪化と、時刻が遅くなつて来た事等から来る、疲労、焦り等によつて、トップを登つていたいづれかが、スリップし、そのショックでジッヘルしていた者のセルフビレーがはずれ、両人共相前後して、山内は第一尾根側に、青木はB沢側か或は、第一尾根側かに転落したものと思われる。その間ザイルが岩角をすべつてずり切れ、両人別々になつて、山内は第一尾根とクラック尾根の間のガリーを滑落し、更にB沢を滑り、北山稜の末端のちよつと開けた所で、傾斜が緩くなつているのと、デブリがあつたのとで、停止し、青木も同じ様に滑り落ち、山内のすぐ側に停止したものと思われる。

以上現在判明している事柄から、推定した遭難の様相であるが、これは、あくまでも推定であつて、目撃者が居たわけではないから、確実なことはわかり得ない。この点お断りしておきたい。

以上で、春山合宿及び遭難の記録、報告を終りますが、遭難に際し、東京大学山岳部、岐阜登高会、日比谷高OBの方々や、又北飛山岳会、地元警察署、消防団の方々や、その他多数の方々御協力下さいました。又学校当局を始め、高木部長パタゴニア遠征の為部長代理となつていただいた丹

羽助教授や先輩の方々には多大の御迷惑、御心配をおかけしましたが、ここに紙面を借りて、感謝の意を表したいと思います。

### 第3章 反省

春山合宿は、悲しむべき遭難をもつて終了した。この春山の反省は、遭難の反省によつてその重要な部分が集約されると考えられるので、ここでは、この遭難を中心に、ふりかへつて省たいと思う。

帰阪して以来、OBを混じえた反省会や、OB自身や現役自身だけによる反省会が度々開かれ、このうちつづく遭難の根本原因を究明すべく、真摯な反省、検討が繰り返えされた。更にパタゴニア探検隊の帰国に伴い、高木部長を始めとして、各隊員により厳しい批判が行われた。ここにそれらをもとにして我々がまとめた反省を述べて見たい。まず、計画面における反省を行つた後、装備面、天候の面、実際の行動の面における反省を行い、最後に総合的な反省を述べることにする。

#### 1、計画面より見たる反省

まず、我々が計画した、穂高岳合宿が、妥当かどうかということ、即ち部の実力に相応した計画であつたかどうかということが問題となる。参加した10名の部員について見ると、三年部員二名、二年部員四名については、アイゼン、ビッケル等の冬山技術は、信頼するに足るものを体得していたと思われる。これを、それ迄の各人の合宿参加状況から見ると次のようになる。

これに加ふるに、各自神鍋、氷の山、大山等にテント持参でスキー行をしているので、二年部員以上は、ほぼ50日以上積雪期の山を経験していたことになる。又その他の合宿もほとんどが全員参加している。このような春山参加メンバーの各合宿参加

32年度春山合宿参加メンバーの各合宿参加状況一覧表

30年度	水口	齊藤	青木	山内	豊田	中家	荻原	福本	岡田	村上
夏山(涸沢)	○									
秋山(北鎌荷上)		○								
冬山(志賀高原)	○6	○6								
春山(北鎌尾根)	○20									
31年度										
5月(鹿島槍)	○		○	○						
夏(剣岳)	○	○	○	○	○	○				
秋(富士山)	○3	○3	○3	○3	○3	○3				
冬(黒菱、猿倉)	○13	○13	○13	○10	○13					
春(小日向尾根)	○21	○23	○24	○18	○23	○23				
32年度										
5月(岳沢)	○		○	○	○	○	○	○	○	○
夏(涸沢)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
夏(奥又白)		○	○	○	○	○				
秋(涸沢その他)	○3	○3	○3	○3	○3	○3	○3	○3	○3	○3
冬(乗鞍)	○7					○7	○7	○7	○7	○7
冬(岳沢)	○9	○11	○13	○13	○13	○9	○6			○6
積雪期入山日数(概算)	82	59	56	47	55	45	16	10	10	16

状況から判断すれば、積雪期の穂高合宿穂高の稜線を自由に歩きまわろうという計画は、無理なものではなく充分遂行し得るものであると考えられた。具体的に計画について見れば、明神ルート、西穂ルートともに秋山以来の綿密な偵察の結果、充分やり得るだけの見通しと、自信を持つことが出来たし、又参加メンバーの実力もこれをやり遂げるだけの実力はあつたと考えられる。唯人員の関係から、始め予定していたサポート隊を同行させることが出来なくなつたので、少々縦走隊の負担が多くなり、この点が懸念された。又涸沢経由の本隊も、涸沢における雪崩を警戒しさえすれば、あとはザイテングラードに取付き、比較的完全に、穂高小屋に到着し得ると考えられた。従つて三年一名、二年一名、一年四名

という弱体な構成の隊でも安全に到着できると考えられた。この様に穂高小屋への集結迄の計画には、無理はなかつたと思う。事実、天候に恵まれたとはいえ、ここ迄の計画は非常にスムーズに遂行できた。又一年部員対象の穂高各稜線のトレースも絶好のトレーニングでもあつたし、滝谷第二、第四尾根の登攀も、夏山の実績から見れば、無理のない所であつた。唯クラック尾根は、夏山において登攀した者が、不参加の為、トレースしていない他の者(最初の計画では齊藤、青木)が、アタックすることになつていた。この点、滝谷を甘く見ており、軽卒であつたと思う。又、最初の計画では、クラック尾根、第四尾根のアタックを、同日に行う予定であつたが、これも残りのサポート隊が弱体になり、しかも

それが二つに分散されることを考えれば、これだけのメンバーでは、少々無理であり一日、一パーティずつのアタックを行つてそれを全力を挙げて、バックアップする必要があつたと思う。この様に計画においては、滝谷軽視の面があつたことは、反省すべき点である。

## 2、装備の面より見たる反省

最も重大なる点は、ナイロンザイルを、余りにも軽々しく使用しすぎたということである。遭難の原因が直接ナイロンザイルには、無かつたとしても、結果においてはザイルは切断されていたのである。

我部においては、例の岩稜会のナイロンザイル事件以来、高木部長によつて、ナイロンザイルの性能が、はつきり確定される迄、その使用が禁じられていた。しかるに我々当時のリーダーシップを握つていた者は、その使用禁止を知らず、唯ナイロンの長所とされる軽いということと、濡れても凍らないという所から、積雪期においては、一般の麻ザイルに比べて、著しく、その取扱いが容易であるという利点にのみ心を奪われ、その性能についての充分な検討もせず、他の山岳会において使用されているということから安易に考え、西穂、明神縦走隊の荷物の軽量化の為に、合宿間際になつて、放出の11ミリナイロンザイルを二本購入した。これは、初めは、比較的岩稜の露出していない稜線に行く、縦走隊においてのみ使用し、他の場合は、麻のザイルを主に使うという約束であつたが、いざ合宿において使用して見ると、麻のザイルに比べて、非常に扱い易い為、もつぱらナイロンザイルを使用することになつてしまつた。しかも、北尾根、第二尾根等の岩稜における使用によつて、著しい「けばだち」が生ずることを見て、岩のある部分での使

用は危険じやないかと考えたにも拘らず、その使用を続けたのは、重大な誤りであり、我々の山に対する常識が無いといわれるゆえんである。

このように我々が、我部におけるナイロンザイルの使用禁止ということ、知らなかつたということは、先輩達との接触が本当のものでなく、唯通り一辺のものであつて、合宿計画等についても、先輩と現役との間のコミュニケーションが充分行われていないということの意味するものであると思う。と同時に、我々の山についての常識が、自分で思つている程には、充分でなく、どこか大切な所が抜けていて、ひとりよがりの所があるという事をも意味するものであり、この点充分な反省が必要であると思う。

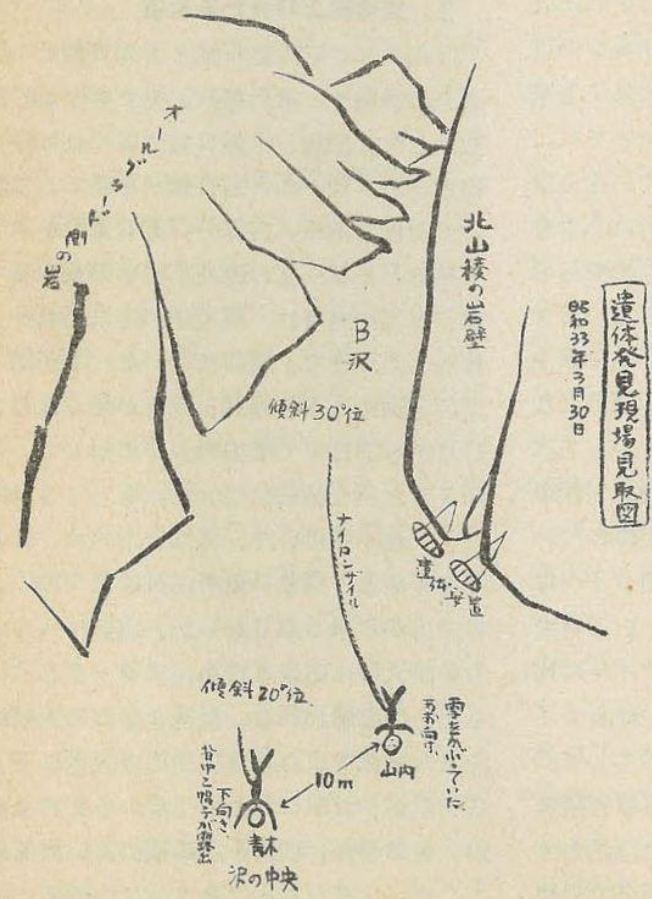
## 3、天候面より見たる反省

計画における実動日数と予備日数とは、過去の経験や、資料から、半々即ち同じ日数にした。勿論、予備日数は多ければ多い程良いが、我々の合宿日数から見て、これが限度である。実際の行動をふりかえつて見ると、第一期の穂高小屋への集中までは、天候に恵まれ、縦走隊がそれぞれ一日停滞しただけで、順調に行つた。所が第二期の計画に入ると俄然、天候が悪くなり、17日から28日までに実動5日に対して、停滞7日という結果になつた。そして3月28日、北穂小屋にいた、青木、山内は、この様な停滞と、残り日数が二日になつたのと両方から来る焦りからか、或いは久方ぶりの晴天に、いさんでか、アタックを敢行したものである。昼過ぎからの天候の急激な変化を思うとき、彼等の天候に対する判断が、甘かつたといえるかも知れないが、あの場合、穂高小屋に残つていた部員も、ジャンダルムヘフィックスの撤収に出

かけていたのであるから、当時の天候状況から見て、クラック尾根に取付いたのは無理のないことだと考えられる。唯取付いたのが時間的に遅かったのは、天候の変化とも関連して、反省すべき点であると思う。

#### 4、実際の行動面よりの反省

第一期は、全くスムーズに進んだ、天候に恵まれ、予備の日を二日残して、予定通りに穂高小屋に集結出来た。第二期に入ると天気が悪くなり、一期で浮いた予備日数は、たちまちくい込んでしまった。そして行動第二日目の21日にジャンダルムへ福本とともに出かけた齊藤が、ロバの耳の取付でスリップし、白出し側に転落するという事故が生じた。幸い大したことはなかったが、行動することは不可能であったので、以後の計画に多少の変化と、縮少が余儀な



くされた。そして、滝谷のうち、青木の強い希望もあつて、第四尾根は割愛し、クラック尾根を、青木、山内の二人でアタックすることに決定した。しかしそれは、一年部員の稜線歩き及び北尾根、第二尾根のアタックがすんでからということに決めた。そして23日、24日の両行動日において、その計画も実行することが出来て、残るはクラック尾根のみということになった。しかしこれについても、夏にクラック尾根をトレースしていない青木、山内の両名を、アタックに向わせたことは、やはり遭難の原因の一つであつたかも知れないが、青木の強い希望があつたとしても、それを抑え切れなかつたリーダーシップを取っていた私達の反省すべき点の一つであると思う。

25、26日の二日の停滞の後、27日青木、山内は、北穂小屋へ向つた。この時、岐早登高会の高橋、佐藤両氏も一緒であつた。登高会とは、青木の兄が、その会であり、反省すべき重要な点である。ポーターであり、又森田先輩がその場合に全員が一つの同じ目標を持つて行動する場合と異なり、今度の様な分散登山においては、その一つ一つの行動が、部活動そのものであるという意識が薄くなる傾向があり、各パーティに分れた場合、自分達だけで登っているんだという気持ちになり易い。この点行過ぎない様に注意しなければならないことであると思う。

又、当時の合宿の空気は、第一期の計画が順調に進み、全員穂高小屋に集結して一息つき、第二期に入り天候が悪く、停滞が多かつたのと同時に、四日間の行動によつたような感情が山岳部の行で、計画のほぼ八割を済ませていたし、又一年部員が長期の合宿で、疲れを見せておになっていたのは行き過ぎり、全体に少々緩んでいた様に思われる。そして行動二日目の、齊藤のスリップ事故も又そ

の結果が、クラック尾根アタックに向つた青木、山内にサポート隊をつけず、丁度同じ様に北穂へ行き、滝谷アタックをする岐早登高会の人達に、その役を依頼したという様な形になつてしまつた。勿論、青木、山内 両名の技術、ファイト、意欲等は、我部において第一級のものであつて、次期のリーダー、マネージャーに予定されていたのであつて、彼等に対しては十分な信頼を置いていた。そして彼等を信頼するあまり、サポートに予定していた一年部員の北穂迄の同行を、当日の天候及び北穂への稜線の状況から考えて取り止めた。又当日、北穂から帰つて来た、豊田、中家を彼等のサポートとして、再び北穂の小屋へ引返さずには、疲れていたし、天候も良くないので、結局、青木、山内両名のみでクラック尾根をアタックさせたことになり、部の総力を挙げての、彼等に対する支援を行わなかつたのであり、ひいては、部員の彼等に來する精神的な面でのバックアップの欠除をももたらした。この点、リーダーシップを取つていた我々の滝谷軽視の現れであり、反省すべき重要な点である。ポーターであり、又森田先輩がその様に全員が一つの同じ目標を持つて行動する場合と異なり、今度の様な分散登山においては、その一つ一つの行動が、部活動そのものであるという意識が薄くなる傾向があり、各パーティに分れた場合、自分達だけで登っているんだという気持ちになり易い。この点行過ぎない様に注意しなければならないことであると思う。

又、当時の合宿の空気は、第一期の計画が順調に進み、全員穂高小屋に集結して一息つき、第二期に入り天候が悪く、停滞が多かつたのと同時に、四日間の行動によつたような感情が山岳部の行で、計画のほぼ八割を済ませていたし、又一年部員が長期の合宿で、疲れを見せておになっていたのは行き過ぎり、全体に少々緩んでいた様に思われる。そして行動二日目の、齊藤のスリップ事故も又そ

の現れであつたかも知れない。

又当日、青木、山内両名の出発が、7時頃になつたのは、前日の疲れや、サポートが無かつた為とはいえ、遅すぎる時間であり、出発の際「今日は偵察に行く」といつて出かけたこと等からしても、充分アタックの準備体制が出来ていなかったのではないかと思われる。

このように実際の行動面において反省すべき重要な点は、部を挙げてのクラック尾根の攻撃という気分がなく、従つてサポートも行わず、滝谷を軽く見すぎていたという点、及二年部員の盛んな意欲とファイトを適切に指導し、抑えるところは、適当に抑えをきかすということが出来なかつたリーダーシップの弱体という点であると思う。

#### 5、おわりに

昨年一年、リーダーシップを取つて見て、痛感したことは、高木部長をはじめ先輩達はパタゴニア探険及びその準備に、多忙をきわめ、我々現役の合宿計画等に関する検討をする余裕もなく、又我々も積極的に相談をもちかけようともせず僅か、二年程の山登りの経験しか持たないままリーダーシップを引き継いだ三年部員が中心となり、計画し、運営したこと、それは非常に危険であり、又信頼され得べきものではなかつたということである。

又、こういう点から、我々の山登りが、視野が狭く、唯学校にいる間だけの山登りという様な考えを持つ様になり、大学三年間で山登りを卒業してしまおうとして、自己の実力の認識もなく、ガツガツした、余りにも苦しみの多い且つ危険性の多い記録主義の山登りを行う様になつて来たのではないであろうか。これからは、もつと大きな視野をもつて世界の山々を目標として、じっくり腰を落ちつけた、一生かけての山登りを行うという心構えが必要なのである。 (前年度チーフリーダー)